

御傍衆が義豊の名のもと、施政を私的に振る舞うまでに、さほどの時間は要しなかった。その権威を傘にして、御傍衆は既得権の拡大を望んだのである。

鶴谷八幡宮棟札の一件で、何事であるかと詰問するため、足利義明の使者が訪れた。しかし、義豊はこれさえも追い返した。里見氏と小弓公方の関係が急速に冷え切っていたのは、まさにこの頃のことである。

それでも戦乱に拡大しなかったのは、必死になつて取りなす実堯たち奉行衆の尽力に他ならない。

彼らの巧みな外交で、足利義明は真里谷勢を安房へ差し向けず、猶予を与えただけに過ぎない。そのことを義豊は理解していなかった。

小弓公方との決裂を望み、古河公方の副帥を求めて、義豊は「一統」の第一歩を踏み出そうとしていた。

享禄四年（一五三二）九月二四日、扇谷上杉朝興は各地転戦の総仕上げとして岩附奪回を試み、この日ついに奪還に成功した。

敵將・渋江三郎を討ち取り、岩附城には数年ぶりに太田美濃守資頼が復帰した。

岩附が扇谷上杉氏に回復されたことにより、武蔵国の戦国絵図は大きく変わった。

古河へ睨みを利かせ江戸を制する立地にある岩附は、小弓公方にとっても有難い戦局の変化といえよう。この岩附回復の自信が、朝興の心にひとつを決断をした。

翌年、扇谷陣代から取って代わるべく、朝興は嫡流の藤王丸を殺害し党首の座を奪い取った。この事件は、名門とうたわれた上杉家の信用失墜につながる。

同じ年、千葉氏でも勝胤が没し、北条一辺倒の昌胤の時代となった。

上総・下総・武蔵の接合地域は、そのまま古河公方・小弓公方・北条の三竦み状態となり拮抗した。

真里谷武田氏は里見どころではなかった。

安房侵攻が行われなかったことの背景には、このような奇遇の奇蹟が隠されていたのである。

享禄五年は「天文」と改元された。

この年、北条氏綱は相次ぐ戦乱で焼け荒れた鎌倉の再建をするために、敵味方なく声を掛け始めた。不足する木材の提供を呼びかけたのである。

「笑止な。鎌倉再建の号令は、代々関東管領の職務なり。上杉を差し置いて北条が号令するなど、片腹痛い」

上杉家からの反応は、冷ややかだ。

無論、北条氏綱は軽率な人間ではない。古河公方・足利晴氏の名で、これらの勧進を行っている。そのためだろう、快く応じる者は少なくなかった。

この呼びかけは、鎌倉を焼いた当事者である里見義豊にも求められた。

古河公方に寄ろうと傾き始めていた義豊は「あてつけなり」と、怒りを露わにした。

この勧請が、ふたたび小弓公方に依るきつかけとなるのだから、古河方が寄せる義豊への評判は「変節漢」と囁かれた。

これは結果として、仕方のないことだ。

が、小弓公方派に寄るといふ決断に関しては、奉行衆も一致するところである。そのためか、北条との外交は実堯に任された。現実問題として、やはり御傍衆では心許ないというのが、義豊の本音である。

中里源太左衛門・本間八右衛門は、このことに異を唱えた。義豊はうんざりした表情で

「誰でもいいのだ。一度は壊れたものを、色々と修復させるためには力量ある者を用いるに越したことはない」

「我らは木偶に非ず」

「信頼を寄せるに足る力量もなく、吼えることなかれ。精進せよ」

これは現実なのだ。しかし、面白くない。

北条外交で実堯は実績を為すだろう。そうな

れば義豊は奉行衆を評価し、これを再び用いるに違いない。そうなれば御傍衆の面目がなかった。

中里源太左衛門は秘かに御傍衆を招集すると「奉行衆を闇討ちとするべし」と叫んだ。

十十十

相剋のはじまり(4)

夢酔 藤山